

公德心を体した「真の国際人」を育成する

東京国際大学 理事長・総長
倉田 信靖



くらのた・のぶやす氏

1937年生まれ。大東文化大学教授。同大学名誉教授。大学教授当時からマスコミ総合研究所理事長として活躍。2009年9月より学校法人東京国際大学理事長・総長に就任。著書に『王陽明全書』、『李綱文集』、『三事忠告』、『吉田松陰』(明德出版社)、『連戦』(早稲田出版)などがある。ウィラメット大学名誉人文学博士。財団法人昭和経済研究所理事長

太平洋戦争終結の後、占領政策のためにGHQがわが国に設置された際、英語に堪能なすぐれた通訳者が必要とされました。その一人として奔走したのが本学創学者、金子泰藏先生でした。知識人であるがゆえに、日本に在りながらも激しく外国の洗礼を受け、人生観を大きく変えたといわれます。資源のないこの国が諸外国に拮抗していくにはどうすればいいか、これから求められるのは教育であり、それこそが自分の使命である——と自覚するにいたり、そこでまず「一橋学院」という予備校を立ち上げ、大きな成功を収めました。その後、「国際商科大学」を1965年に創学。それが本学の前身であり、1986年より現校名に変わりました。

真の国際人の養成。これが創学以来変わることのない本学の理念です。1965年当時としては、大変稀有な大学だったはずですが、しかも、単なる理念ではなく、創学の年に早くもアメリカのウィラメット大学と提携を約束し、国際展開の第一歩を踏み出しています。その後、ウィラメット大学にて日本研究プログラムを開始したり、1989年には東京国際大学アメリカ校(TIUA)をオレゴン州に開校。現在本学は世界11カ国(地域)の14大学と提携しており、毎年30カ国以上から日本研究のために留学生が本学を訪れる一方、本学卒業生の8人に1人は海外留学を経験しています。真の国際人を養成する大学として申し分のない環境を提供できていると思います。

損得を超え、日米の架け橋となる

海外キャンパスの経営はうまくいっているのかと、人に尋ねられることがあります。正直なところ、苦しいときもあります。しかし私からすれば、それは二次的な問題。教育は儲かる、儲からないだけで判断すべきではありません。オレゴン州のアメリカ校は、その一帯の方々の日本に対するイメージを著しく向上しているものと私は信じています。アメリカ校は、日本の教育や文化を定着させるための、アメリカにおける発

信基地なのです。本学のいう「真の国際人」とは語学力に秀でただけの人材をさすものではありません。本学のめざすのは、民族、宗教、国境をすべて俯瞰的に見うる見識を持ち、公德心を備えた、心身ともにバランスの取れた健全な社会人の育成です。創学者は来たるべき社会のために、自らが日米の架け橋となって貢献するという想いで教育活動に邁進しました。「公德心」、いわゆる人ならではの倫理、道徳、全ての人にいきわたる徳です。そのような崇高な心を受け継ぎ、私もささやかながら日米の架け橋づくりに力を尽くしているところです。

創学以来続く、本学の誇るもうひとつの伝統は、少人数教育です。「全学年全員ゼミナール制」をとっており、1年次から4年次まで全員がゼミに所属して学びます。多感な年代の学生たちには、とてもフィットしているようです。実業界での経験豊富な教授陣が、密度の濃い人間関係のなかで、対話を重視した少人数教育を行う。実学を学ぶ手法として、大変効果的です。

そうしたソフト面の充実に加え、ハード面にも力を入れています。本学がコンピュータ教育を開始したのは1982年。以来、常に最先端の機器を揃え、文系大学としてはハイレベルのIT教育・環境を備えていると思います。また、実習施設、スポーツ施設も整え、なかでもここ数年で整備を進めてきた坂戸キャンパスのスポーツ施設は、日本の大学として間違いなく最高レベルの環境であると自負しています。

こうした教育による成果は卒業生に表れています。例えば財界では、資生堂現社長の末川久幸氏、エスエス製薬前社長の羽鳥成一郎氏など、企業トップに上りつめた卒業生は少なくありません。国会議員は3人、研究者やミュージシャンは数多く、また推理作家の横山秀夫氏も本学を卒業しています。今後はスポーツ界にも数多くの人材が飛び出していくでしょう。本学は国際性にあふれ、個性ある人材が輩出される土壤があると社会からは評価されているようです。

カレッジは優れた指導者により磨かれる

人々の寿命が延びたことは喜ばしいものの、医療や

福祉の費用は、国家財政に年々重くのしかかっています。その一方、日に日に複雑化する社会システムのなかで、心を病む人が増えているのも事実です。これらを解決する、とまではいわないものの、多少なりとも解消できると科学的に証明されているものがあります。それは「スポーツ」です。病気を予防し、高齢者の自律に貢献し、精神的な開放も促す。スポーツが万能薬たるゆえんはここにあります。

国が「スポーツ立国」を打ち出している。ならば私たちもそれに協力しよう。中途半端でなく、やるのなら日本一協力をしよう。本学がこのところスポーツに力を入れ始めた背景には、そうした事情があります。もともと、本学の理念のなかにも相通じる考え方がありました。真の国際人を養成するために「高い理想(ビジョン)」「行動する勇氣(カレッジ)」「知的教養(インテリジェンス)」という3つの柱を創学者は示しましたが、このうちのカレッジはスポーツで育ち得るものとして、これまでも学生たちは真剣に取り組んできました。ここに改めてスポットを当て、大学として最大限の支援をしていきたいと考えているのです。

カレッジは優れた指導者により磨かれます。そのため古葉竹識・硬式野球部監督、宇津木妙子・女子ソフトボール部総監督、ラリー・ネルソン・ゴルフ部名誉監督、横溝三郎・駅伝部総監督など、世界を知る一流の指導者を多数招き、それに負けないスポーツ施設も整え、高い目標に向けて邁進しております。

硬式野球部は春季リーグを制し、初優勝しました。そして第60回全日本大学野球選手権記念大会への出場を決めました。次は、箱根駅伝がもうすぐ視界に入ってくるでしょう。あと4年で創学50周年。その時までどこまで強くなっているか、とても楽しみです。スポーツを通じて学生の「公德心」を育成するとともに、スポーツ立国として日本を元気にしていきたいと考えています。そして、本学の建学の精神である公德心を体した「真の国際人」の育成を実践していきます。まだまだ力を抜くわけにはいきません。本番はこれからです。 ■